

【境内社(けいだいしゃ)の神様】

山之神社(やまのかみしゃ)

狩猟の神様である狩法神(かりほうしん)の七神崎(しちこうざき)を祀る祠の一つで、銀鏡地域にある鹿倉社(かくらしゃ)十二社の総元の社(やしろ)である。

※鹿倉社には、猟場や山の産物などの守る神¹山の神が祀られている。

この山之神社は、古くは龍房山の南面、標高800メートルの大字中尾字奥畑にあったが、明治の初めころに現在地に遷(うつ)された。

なお、銀鏡神社では、式三十三番の「ししとぎり」の奉納が終わった後、最初に神社に奉納された猪肉を、七切れ肴(しちきれさかな)とし竹串に刺して神前に供えますが、その時、最初に備えるのがこの山之神社である。

※七切れ肴は、「ししとぎり」の神楽で猪に見立てた「まな板」(イノコシバ)がくくりつけてある)を使って心臓などを七つに切って作られる。

若宮社(わかみやしゃ)

神武天皇が東征^{※1}(とうせい)された時、八咫鳥(やたがらす)^{※2}に身を変えて天皇を導いた賀茂建都美命(カモタテツミノミコト)を祀っている。

この神は、黒木姓(この地に多い姓の一つ)の元祖とされている。

※1 カムヤマトイワレビコノミコトが日向を発って東に向かう途中で荒ぶる神や豪族を平定して大和に到着し即位するまでの進軍などの様子。

※2 三本足の鳥(からす)。賀茂建都美命の化身。

山之神社 一番右



若宮社 右から2番目



東米良観光案内

八幡社（はちまんしゃ）

もともとは、大字銀鏡字中島の八幡山に祀られていた。

その後、明治2年に村人が米良主膳（めらしゅぜん。米良領主）に、田地を拓くために八幡山の払い下げを願い出て許可を受けたが、その時、八幡社は銀鏡神社境内に遷された。それ以来、この田は八幡田（はちまんだ）と呼ばれ現在も水稲が耕作されている。

矢村社（やむらしゃ）

征西將軍懷良親王（せいせいしょうぐん かねながしんのう）の随従武将で南朝※の末裔を助けて早くに米良山に入山した人物に鈴木七郎民部少輔惟継（すずきしちろう、みんぶのしょうこれつぐ）がいる。

惟継は、その時、鈴木家の氏神である「矢村社」も一緒に持ってきた。この神が祀られている。

のちに、惟継は鈴木姓を瀆砂に改めた。これが銀鏡神社宮司瀆砂家の元祖となり、山峡にありながらも、この地に多い瀆砂姓の由来となっている。

※ 惟継の住んでいた「瀆砂屋敷」の跡地は、「松の下さがり」ともいい、今も旧銀上小学校の北隣にある。

※ 南朝とは、南北朝時代に吉野にあった朝廷（後醍醐天皇など）。同時期、京都には足利尊氏が擁立する北朝（光厳天皇など）があった。

八幡社 左から2番目



矢村社 一番左



全体

